

慟哭の先へ

藤堂 隆一

1

死は生に還り戻ることに他ならない。

そう言ったのは果たして聖書であつただろうか。

それは間違えてはいない。俺の死は確かに それは狂気に溢れてはいたが 二度目の誕生の為の布石だつただろう。そうでなければ、俺がここにいられるわけがない。

ネオン輝く街路を、俺はゆつくりと歩いてた。繁華街から遠ざかる。酒を飲む気分じゃない。それに、飲む必要もない。俺には。まるで輝かしい世界に背を向けるように、俺は薄暗い裏道へと踏み出した。

それは多分、自らの生み出した幻影故だろう。俺がネオンに背を向ける必要なんてない。望むまま生きればいいのだろう。俺にはその力があるはずだ。だが、俺の心がそれを拒んでいた。そう、俺には明るすぎる、と。闇を生きる者が好むその輝きさえ、俺にとつては明るすぎるのだ。

「よう、おっさん」

ふと、顔を上げる。薄暗い道の真ん中には、若者が三人。俺も決して歳をとっている訳じゃないが、間違いなくこう言える。餓鬼が三人。

「金がなくてさ。ちよつと融資してくれない？」

パーカーを着て、髪は茶髪。体格はそこそこ。ここらでは有名な悪餓鬼。その程度だろう。俺は無視して歩き始める。こんな馬鹿共につき合っている暇はない。訂正。暇はあるが、馬鹿共に費やすほど安売りしてもいい。

「おい、無視かよ」

餓鬼が、不機嫌そうな声を出す。遊ぶ金がない程度でよくそこまで無心になれるものだ。俺を。俺をミテみる。その程度で俺に触れるな関わるな。

振りかぶられた拳は、寸分たがわず俺の顔面に衝突する。衝撃。神経回路が脳にそれを伝える。

だが、俺は痛いとは感じない。後々が面倒なので勢いよく吹っ飛んでやる。着地。ふらついたように足を千鳥に。自分で自分を賞賛する。これが二年前にできていた俺も役者になれていただろう、と。

餓鬼共は満足げにニタニタと笑っている。さつさと金を出せば痛い思いなんてしなかったのによ、考えているのはそんな事だろう。残念だったな、俺はその程度ではよるめきもしない。出来ない。

ふと、軽く苛立ちを覚える。なぜ俺がこんなことをしなければいけないのか。こんな目に遭わなくてはいけないのか。こんな目に。

俺は、自分の手を見下ろした。鮮やかな赤が見える。

幻覚。見えるはずのないその罪は俺をいつも責め立てる。俺はまだなんの罪も背負っていないのに。俺はそれを背負わされているだけなのに。

そつだ、俺がなぜこんな目に遭わなくてはいけないんだ。

その思考と、手が伸びたのは同時だった。それでも本気ではなかったのは自制心……いや、そんなものではない。俺はただ単に恐かったのだ、それを見てしまうのが。

俺が俺でなくなってしまうのが。

だが、ただの餓鬼にはそれで十分だったらしい。

餓鬼は俺が演技したように吹っ飛んだ。俺との違いはそれが演技ではないということだけだが、しかしそいつは鼻から血を垂れ流して倒れたまま動かない。人間ってのは本当に『吹っ飛ぶ』んだな、と無感動に考える。『てめえっ！』

餓鬼共が騒ぎ始める。どうやら奴らにも仲間意識つてのがあるらしい。今日は一つ学んだ。だからどうつてこととはないんだが。

とりあえず、面倒だ。俺は餓鬼共に背を向けて走り始めた。すぐにネオンの輝きが目に飛び込んできて俺はそれにも背を向けた。間違えた判断。繁華街に向かい、人の多い通りを走った方が面倒がなかったらうに。だ

が、一度選択してしまったものは覆せない。過去に戻れば覆せるかもしれないが、それが出来るのならとつくの昔にやっっている。

走る。こんな事をしているのが馬鹿らしくなる。走る。全力を出さなくても良い。走る。ちよつと捻つてやれば、この面倒は全て片づくだろう。走る。だが、それは本当に俺の意志なのか。走る。お前の意志じゃないのか。走る。俺は違う。走る。俺は……違わない。

まだ、追いかけているようだ。軽く舌打ち。別に百キロ走ろうが疲れる事なんてないが、一晩中マラソンそして過ごすのはそれも面倒だ。ゆっくりと闇に沈んでいた。

辺りを見回す。手頃な建物はないかと考え、発見。古ぼけた教会がある。別に民家でも問題はないが、教会の方が面倒が少ない。少し立ち止まる。俺は教会に入っても良いのだろうか。ここは聖なる場所のはずだ。俺が……

だが思い出す。救いを求める者が入る場所でもあったはずだ。それなら俺にお似合いだ。俺ほどに救いを求めている者もそういないだろう。ただ、問題なのはそれがキリストには救えないって事だけだ。いつの日か訪れる千年王国でなら救われるかもしれないが、生憎それを待っていられるほど悠長な状態でもない。

俺は教会に向かつて踏み出した。運良く礼拝堂の窓に

鍵がかかっていない。いや、この感覚だと鍵が壊れているのだろう。まったく、不用心な事だ。悪党にでも忍び込まれたらどうするんだ、と考え、今忍び込もうとしている自分に苦笑する。誰の邪魔もしなければ、問題はないだろう。少し椅子を借り、誰かが来る前にここを立ち去る。迷惑を被る奴は誰一人いない。俺の靴についていた泥で少し床が汚れるかもしれないが、礼拝堂なんて毎日磨き上げるもんだ。問題ない。

静かだ。餓鬼共は俺を追いかけられることを諦めたのだろう。ただ、静寂のみが世界を支配している。古ぼけたキリスト像を見上げながら、俺はただ椅子に身を沈めた。

なんであんたはその身を捧げたんだ。そんなことよりもしたいことはあっただろう。何も特別な事じゃない。友人と馬鹿話して、遊んで、女つくって結婚して。子供が出来て、孫が出来て。そんな、ごく普通の人生を。

だが、俺たちはもう戻れない。戻れないんだ。あんたがゴルゴダの丘を登って、死から舞い戻ったように。俺も二度目の生を受けてしまった。俺が望んだ訳じゃない。俺が……。勝手に望んだ奴がいて、俺はそれを背負わされただけ。

吐き気。嘔吐。鼻につく匂いが広がる。なんで俺がこんな思いをしなきゃいけないんだ。こんな事をする為に俺は生まれてきたんじゃない。俺の一度

目の誕生は、祝福に包まれていたはずだ。

だが、二度目の誕生は狂気に包まれていた。

絶望できればどんなに良かったか。だが、俺には出来ない。あいつがいる限り、俺に絶望なんてできやしない。

物音。開錠。錆びた金属が鳴らす、不愉快な閉閉音。誰かが、来た。

だがそれは静寂と共にだった。先ほどの餓鬼共ではないだろう。それに、しっかりと鍵を開けて入ってきた。

この関係者だろう。

吐瀉物を見る。これを片づける暇はない。面倒な役を押しつけられる奴が一人出てしまった。

「誰か、いるの」

おびえも迷いもなく解き放たれたその音はどこまでも澄んでいて、礼拝堂という空間に広がってきた。なぜか、涙がこみ上げてきた。なぜだ。

「あなた」

相手はこちらがまだ見えていないはずだ。なのにまるで最初から判っていたかのようにその声は歩き始める。まずい。俺は椅子から飛び降りると一目散に逃げ出した。

わき目もふらず、こころばらくでは久しぶりに全力で。まるで、自分を隠すように。ネオンの光が生み出す、あの闇の中へ。

「よう」

俺は座っていたベンチから見上げるように顔を上げると、見知った顔がそこにあつた。タナカだ。同僚。

俺には、必ず月に一回の診断がある。身体に異常があるかどうか調べるあれだ。それは俺のもっとも嫌悪する一つなのだが、残念ながらもはやそれ無しでは身体を保てないのだ。俺に幻覚を見せる、要因。

「相変わらず、湿気でんな」

タナカは俺に全く遠慮する様子なく煙草を取り出して火をつける。一服。吹き出した煙は大気に混ざる。

「……健康に悪いぞ」

俺が冗談半分に言う言葉に満足そうに頷く。

「そんなのとつくの昔に捨てたよ」

タナカはそう言いながら、深く一服。瞬く間に灰になった煙草は、しかし奇術のように一瞬で消え去る。跡形もなく。タナカは満足そうに微笑みながら、握っていた煙草のパッケージをしまい込む。

対して、俺はそれに何の感慨もなく宙の一点を見上げている。タナカが煙草を吸うのは知っているし、それでどうこう言おうとも思わない。昔から他人に干渉するのは趣味じゃない。特に、その傾向は二年前から強まった。俺の望む望まないに関わらず。

それでも、あの日の夜のことが少し気になる。

「なあ」

タナカも同じように宙の一点を眺めていたようだ。実際、俺たちのような存在はそうしている時間が最も長い。何をやる訳でもなく、何をやる必要もないからだ。そして、目的を失う。ある意味、ここの狙いはそこにあるのだらう。

「ヤマグチって覚えてるか？」

少し考えて記憶を掘り出そうとする、が、すぐに諦める。俺とタナカはほぼ同時期にここに入っている。だから、こうして話すようになった訳だが……ヤマグチつてのは別にそうでもないはずだ。なら、覚えていなくても仕方がない。ここはそういう場所だ。

「いや」

「だろうな。お前、人付き合い悪いからな」

タナカは面白そうに笑う。ただ、その言葉に残る違和感だけが馬鹿話をしている訳じゃないと俺に教えていた。「俺たちが検診に来るといつも一番に出てきてた奴だよ。ほら、いつもフライトジャケット着てた」

そう言われて、思い出した。誰よりも早く検診を終了させようとしているから、よほど熱心なのか。俺たち以上に嫌悪しているのかだろうとタナカと話した覚えがある。

「思い出した。いつも同じジーンズだった奴だろ？ 着てるYシャツにセンスのない」

「そう、そいつだ、そいつ。センスないのはお前も一緒だけだな」

タナカはそう言いながら再び煙草を取り出した。ライターを取り出して火をつける。一服。

「死んだぜ、あいつ」

何気なく煙と共に吐き出されたその言葉は、俺の内でも大きく重くなる。死んだ。別に親しかった訳じゃない。話したことすらない。ただ、知っている人間が死んだだけ。いや、それだけじゃない。

「……あいつ、か」

俺が紡ぎ出した言葉は質問ではなく、断定。俺が、俺たちが死ぬとしたらあいつ以外に考えられない。俺に絶望を抱かせない、あいつ以外に。

「間違いないな。だから何って訳じゃねえけどさ。それでも……なあ？」

タナカはそう言いながら吸い終わった煙草を奇術のように消し去り、そしてもう一本取り出す。

「明日は我が身ってやつさ。だからといって出来る事なんてないのも解ってる。でもさ」

「わかってるよ」

俺は、タナカの言葉の続きを聞かなくてもその続きを

容易に理解することが出来た。でも、俺たちはそれを決して認めたくなんてない。俺たちの二度目の誕生が、存在してしまっただなんて。それが狂気に満ちあふれていたなんて。

「……帰るよ」

俺はそう、言いながら立ち上がった。帰るべき場所なんてないのに。やれるべき事を、やる。そう決意した。明日は我が身だ。俺ももしかしたら……。

「ああ、また、来月な」

タナカも煙草をしまいながら応える。その約束が達成されるかを選択できるのは決して俺たち自身ではない。だが、そうだとしても俺たちはそう願わずにはいられない。こんな身体になってしまったとしても、恐怖は付きまとうものだ。世界はフェアじゃない。

「ああ、またな」

俺はそう言いながら立ち去ろうとする。瞬間、背後から飛来する何かの気配を感じ無意識に振り返りながら掴んでしまう。少し、濡れていて冷えた缶コーヒー。

「餞別だよ」

タナカは、やはり奇術のようになどこからともなく缶コーヒーを取り出し飲み始める。俺はその様子に苦笑しながら、再び歩き始める。

世界はフェアじゃない。だが、フェアな奴はいる。

俺はその夜、再びあの教会に侵入した。何をしに来たかと言えば、あの吐瀉物について詫びをいれに来たのだ。自分の分でもなく知人や家族の分でもない汚物を処理するのはたいへん腹立たしい行為だっただろう。おまけに、それをまき散らしたのは違法侵入者だ。

だが、昼間に謝りに来るわけにはいかなかった。決心したのが昼間だったからというのもあるが、俺自身が大手を振るって歩いていられるような存在ってわけでもないのだ。別に問題がないと言われているが……そう、精神的なものがある。

そういうわけで、また夜にここに侵入したわけだが、だからといってどうやって謝ればいいのか。手紙でも書くのか？　だが、それが効果的とも思えない。いや、効果的である必要もないわけだが。

視界の端で、何かが動く。

その事実には驚愕する。俺の感覚器官はかなり鋭敏だ。誰かがいるなんて事を見落とすとは思えなかったからこそ安心して考え込んでいたのだが。まさか　あいつ、なのか？

だが、立ち上がったのはごく普通の少女だった。夜目の効く俺の眼が伝える情報だと、修道服と言うにしても質素な白一色の服を着ている。胸元には目立たない小さな十字架。

少女は軽くのびをすると、真っ直ぐにこちらを見た。満月の夜だ。確かに普段よりは明るいが、ただの少女にしては夜目が効きすぎるのではないだろうか？

「おじさん」

少し、へこむ。これでも最初の誕生から二十五年しか経っていない。おじさんと言われるには若すぎる。

少女は真っ直ぐにこちらに歩いてくる。興味津々、という様子で、「こちらの上から下までじっと見つめながら。」「この前の夜もいたよね？」「いたよ」

屈託のない笑み。まるで警戒心というものが存在していないようだ。それが逆に俺を萎縮させる。俺は、子供とこんな風に話して良い存在じゃない。

「お掃除、大変だったんだよ？」

「……すまなかったな」

「でも、私のせいってことにしておいたから」

「……ありがとう」

軽い気持ちで返答すると少女は嬉しそうに頷いた。

「うん、お礼の出来る人はいいい人だって神父様が言ってた」

いい人。人。

「ねえ、おじさんは何やってる人なの？」

「俺は……」

さて、その問いにどう答えようか。どう答えようとも、

正しく答えられる自信がない。期待に応えることも出来ない。

「……悪党だよ」

俺は自嘲しながら口を開いた。何をやっているのか。解りやすく説明すれば、それは悪いことをやっている、としか言いようがないだろう。他にどんな言いようがあるというのだ。

だが、少女は不満そうに声を上げる。

「本当に悪い人は自分で名乗らないって神父様が言っていたよ？」

「そう考えさせとけば、逆に名乗った時に警戒されないんだよ」

「そうなんだ。頭いいね」

少女が笑う。その笑みがあまりにも美しく、神々しくて、俺には直視できない。屈託のない笑いなんて。

「で、どうしてまた来たの？ しかも夜に」

「……この前のことを謝りに来たかったんだ。それに、昼間は忙しくて」

「そうなんだ。せつかくだから昼間に来ればいいのに。」

神父様も喜ぶよ」

それだけはないだろうと苦笑する。俺は侵入者だし、神に愛されるとも愛せるとも思わない。

「それより、なんで君は夜に？ 危ないんじゃないか……俺が言うのも何だが」

「あなたが来ると思っただの」

「俺が？ なんでもまた」

「勘」

「……勘か」

「そうだよ。だから、こうやってぬけだして来たの」

満足げに頷く少女。

「そんなことよりもさ、おじさんのこと教えてよ。悪党って何やってるの？ やっぱり私みたいな女の子を騙してるとか？ あ、テレビでやってるの見た。あれでしょ、麻薬みたいなのを売ってるんでしょ」

好奇心旺盛な質問に苦笑する。

「そうだとしたら、まず君は俺を警戒したほうがいいよ」

「そうだね」

変わらず、微笑み続ける少女。

「……そうだな。何をやっていると言われると困るんだけど。同じような仲間と『悪いこと』をやってるんだよ。だから、悪党」

「だから、それって何なの？」

「今を幸せに生きる人にははた迷惑なことだよ」

嘔吐感。それを必死にこらえる。

「ふーん。わかんないの」

「わからなくていいのさ。知る必要なんてない」

俺はここまで話して、自分が饒舌であることを自覚する。こんな初めて会ったに近い、一回りも歳の離れているはずの少女に。

不思議と、笑みがこぼれた。

笑みがこぼれた？ 俺は自分の顔に手を当てる。顔の筋肉は、確かに俺の顔を笑っている顔に仕立て上げていた。本当に、久しぶりに。

「なにやってるの？」

「いや、なんでもない」

少女の視線が上に向かう。それにつられて、俺も壁にかけられた時計を見上げる。針はちょうど天辺で結び会うところだ。

「いけない、神父様が見回りに来ちゃう」

少女は見るからに慌てている。どうやら今回はこれでお開きのようだ。だが、俺はまたこの少女に会いたいと思った。自発的な感情。だが、それも決して悪くない気がした。確かに、明日は我が身だ。だからこそ、俺はやる事をやりたいのだ。

「またな」

俺はそう言いながら帰ろうとすると、少女はすこし呆然となり、そして身につけていた十字架を取り外した。

「これは？」

「これつけてると、昼間に入っても怪しまれないよ。それに、これはきつとおじさんを護ってくれるよ」

「君は良いのかい？」

「うん。ほら、もう行った方が良いよ」

俺は軽く頷き、そして立ち去ろうとする。顔だけ振り向かせる。笑みが顔に浮かんでいることを意識しながら。

「また、な」

それだけ言つと、俺は再び夜の闇に繰り出した。

今日の夜は悪くなかった。そんな事を考えながら。でも、それは決して、良い夜ではなかったのだ。

三日ほど経ち、俺はあの教会にやつてきた。腕には少女から貰った十字架を巻き付けて。さんざん迷ったあげく、訪れたのは昼過ぎ。この時間なら、しばらくはあの少女とは話していられるだろう。だが

「……死ん、だ？」

俺は呆然と呟いた。握りしめた手の中には、少女に貰った十字架。そして果たされることのなかった約束。

「はい」

少女が『神父様』と呼んでいたであろう初老の男性は無念そうに顔を歪めた。

「もともと、身体の弱い子だったので。それが病気で入院を繰り返して。最後を教会で過ごしたいと」



神父は顔を振りながら沈んだ声で続ける。

「神はなぜ彼女のような子供にああまでも重い試練をお与えになるのでしょうか」

俺には何も言えなかった。またと言った時、彼女の見せた表情。決して、またと言いつ返さなかった言葉。彼女は解っていたのだ、もう会えないと。だからあの夜の夜も待っていた。会えるかもしれないという最後の奇跡を信じて。自分に試練を与えた神を信じて。

そして、俺はあの夜に現れた。

「失礼ですが、三日前ほどの夜に教会を訪れませんでしたか？」

「ええ、確かに」

「彼女が言っていました。自分で悪党を名乗る人にあつた、と」

「……」

「また、病気だと知った時の自分にそっくりだったとも言っていました。自分のせいではない事に踊らされて、それでも自分を責めることしかできなかった、自分にそっくりだったと」

「……俺は」

神父はゆっくりと首を振るった。

「彼女からの伝言です。自分を責める暇なんてない、と。そして、貴方はまだ、戦える、と」

俺はゆっくりと頷いて、教会から退出した。

俺はまだ、戦える。

果たしてそうなのだろうか。そうでないのか。それでも、彼女の言葉は俺の中で重く響いた。

唐突に、携帯電話の着信音が響く。

「君の定番だ」

確かに、自分を責めている暇はない。

俺は自然の中に作られた人工物、ダムの上にいた。何を  
するわけでもなく、ただ風を浴びて。

開いた手を見る。化け物の手。

しかし目を閉じれば、自問する声しか響かない。

なぜ、俺はこうなってしまったのか。そして、なぜあの少女は死なねばならなかったのか。どうして。なぜ。彼女が死ぬ必要はなかったはずだ。あんなにいい子が死んで、そして俺たちのような存在が生き残っていることが信じられない。命が平等であるなんてのが嘘であるのなら、俺たちが先に死ぬべきではないのか。薄汚れた、俺たちが。

それでも、先に死んでしまったのは彼女で、そして死に行く俺は後悔に満ちあふれている。

あの日の夜、もつと話していたら。彼女の身体について知っていたら。あるいは。

それを彼女は望まないかもしれない。献身的なキリスト教徒である彼女は決して認めなかったはずだ。それでも、俺は彼女に生きて欲しかった。

どうして彼女は死んでしまったのか。

なぜ、俺はこうなってしまったのか。

そうした自問は決して止むことはない。あの日から。

そうだ、なぜ俺はこうなってしまったのか。

唐突に響く聲音に、俺は振り向いた。

お前だって、俺と同じじゃないか。

悲しみと怒りを仮面に隠して、強く握りしめられた拳はどこまでも哀しみを表して。

俺とお前の、どこが違うというんだ。

お前だって、俺と同じはずだ。望まない牙を植え付けられて、運命なんてものに踊らされて。もう、元には戻れないと知りながらも、それでも進むしかない。俺とお前は変わらない。

いや、一つだけどこまでも違うことがある。それは誰よりも俺が知っている。

お前はどこまでも正義で、

「あ」

俺はどこでも悪で、

「あああ」

それは絶対に変わることがなくて、

「ああああああああああああああああああっ!!」  
俺では……救えなかった。

そう、だから俺は。俺は

俺は。

お前に。

なりたかったのだ。